

'23

前期日程

小論文 1

(共同教育学部 全専攻)

注 意 事 項

1. 試験開始の合図があるまで、この問題冊子を開いてはいけません。
2. 問題冊子は1冊(2頁)、解答用紙は1枚、下書用紙は1枚です。落丁、乱丁、印刷不鮮明の箇所等があった場合には申し出てください。
3. 氏名と受験番号は解答用紙の所定の欄に記入してください。
4. 解答は指定の解答用紙に記入してください。
5. 解答用紙は持ち帰ってはいけません。
6. 問題冊子と下書用紙は持ち帰ってください。

1 次の文章を読んで、以下の間に答えなさい。

僕たちは全知全能ではないのだから、そもそもひとりでできることは限られている。それをひとりでやろうとすることは間違っているのかもしれない。できないなら勉強してできるようになればいい、とも教えられてきたけれど、できないことをゼロからはじめるのは時間がかかるし、それこそ大きなプレッシャーになる。それに、もし僕が1年かけて統計学の勉強をしたとしても、専門家の仕事には到底かなうはずもないし、専門家に頼んだほうがずっとクオリティの高い成果が得られるだろう。そのぶん僕の研究のクオリティも高まるだろうということは、考えてみれば当然のことなのだ。

よりよい仕事をするを第一に考えれば、ひとりでやるかどうかは大した問題ではない。それよりも、それぞれの得意分野をもちよって一緒に課題解決にあたったほうが、ひとりの力ではできないことを実現することができるのである。

他者の力を借りることで、ひとりではできなかったことができるようになるだけでなく、自分が潜在的にもつ成長の可能性までも伸ばすことができる。

子どもが新しいことに挑戦するときに、大人が手を貸したり、有能な仲間と一緒に取り組むことで、自分ひとりの力で到達できるレベルよりも高次の問題解決が可能になる。心理学者のヴィゴツキー (Vygotsky, L. S.) は、これを「発達の最近接領域 (Zone of Proximal Development: ZPD)」と呼んだ。子どもひとりで解決できる現時点の発達レベルと、大人のサポートがあれば解決可能になる潜在的な発達レベルとの間に存在する領域である。

僕がこの概念に感動したのは、人の能力の上限に注目しているところだ。僕たちは「これが自分の能力の限界だ」と感じるレベルがあるけれども、誰かのサポートがあれば、その限界レベルをもっと引き上げることができるというのだ。優秀なコーチに恵まれたスポーツ選手の成績が急に伸びることがあるように、僕らがいまもっている能力よりも、誰かのサポートによって開花する明日の能力にこそ意味があるのかもしれない。

そこで僕は、ヴィゴツキーの考え方を自分なりに解釈して、「憧れの最近接領域 (Zone of Potential Confidence: ZPC)」という概念を考えた。「あの人と

だったらできそうだ」という他者込みの自信のことである。自分ひとりで実現するのは難しいけど、あの人とだったら「憧れ」に到達できるかもしれないと思えること、誰かと一緒だからこそ生まれてくる自信のようなものがあるのではないかと思ったのだ。課題に取り組むときに、自分ひとりでできる範囲を考えるのではなく、先輩や有能な仲間のサポートを得られればこんな仕事にも挑戦できる、という可能性を感じてみよう。そうすれば、仕事に取り組む勇気と希望がわいてくるはずだ。

出典：上田信行（2020）『プレイフル・シンキング [決定版] 働く人と場を楽しくする思考法』宣伝会議，pp.142-146.（出題にあたり，表記の一部を改めた。）

問 1 本文で説明されている「ZPD」と「ZPC」について、これまでのあなた自身の経験について触れながら、具体的に説明しなさい。（300字以内）

問 2 本文で説明されている「ZPC」という考え方が大切にされる学校では、どのような教育活動が展開されると考えられるか。具体例を挙げつつ、あなたの考えを述べなさい。（300字以内）